

大学アメリカンフットボールの日本一を決める甲子園ボウル（12月15日）への第一関門となる東日本代表校決定戦準決勝・パインボウルが、11月3日正午キックオフで、仙台市陸上競技場で開かれる。

北海道と東北地区に甲子園ボウルへの道が開かれて9年目。東日本代表校決定戦決勝（12月1日、横浜）の出場権をかけて今年は、北海道大と東北大が対戦する。前身の東日本学生王座決定戦、北日本大学王座決定戦の時代を含めて今年で32回目になるパインボウルで、両校の対戦は22度目。過去の対戦成績は北海道大の6勝1分け14敗と分が悪いが、今年は例年になくチーム力が充実し、選手たちの士気も大いに高まっている。

今月27日に終了した道学生選手権1部リーグを5戦全勝で制し、2年ぶり26度目の優勝を果たした北海道大。昨年の優勝校・北海学園大との一戦も50-20で快勝するなど、5試合の総得点は328点で1試合平均65.6得点、一方、総失点は39点で1試合平均は7.8失点。攻守に充実した試合ぶりが光った。東北大とは5月のオープン戦で16-19と惜敗しているが、リーグ戦で新人QBが成長し、タレントがそろったRB陣など攻撃力が飛躍的にアップしており、春の借りを返す可能性は十分だ。

注目の攻撃陣ではエースRB荒山赳（4年、東京・麻布高）の走りがチームを引っ張る。165センチ、76キロと小柄ではあるが、抜群のボディバランスと味方ラインを巧みに使うカットバック、高校から通算7年目の豊富な経験も快走を支える。今季はランプレーで858ヤード、14TD、キックオフリターンでも216ヤード、2TDと走り回り、リーグMVPも獲得した。180センチ、90キロの恵まれた体を生かしたRB中牟田晃基（3年、埼玉・浦和高）もリーグ4位の350ヤードを走り9TD。北海学園大戦ではワイルドキャット攻撃を率いる器用さも見せた。ダイブを得意とするRB手塚雅斗（2年、栃木・佐野高）も5TDを挙げている。

攻撃をリードする若手QB2人も楽しみだ。1年生ながら開幕戦から先発に抜擢された茨木大輔（兵庫・六甲学院高）は184センチの長身と高校時代の経験を生かし、5試合で412ヤードを投げて8TD。RB陣の走力を生かす短いパスのほか、ここ一発のロングパスも決めて、リーグ戦の新人賞にも輝いた。2年生QBの佐藤健（東京都市大付高）は肩の強さに加え脚力

も持ち味。北海学園大戦でも後半の勝負所でQBキープを連発して相手守備陣を混乱させ、ゲームの流れを引き寄せた。

リーグ戦で、ラン、パスに続く第3の武器となったキックオフリターンも、東北大の脅威になりそうだ。DB天内太生（4年、江別・大麻高）は北海学園大戦の91ヤードを含めて5試合で4TD。荒山も2TDを挙げており、パインボウルでも期待が高まる。

守備陣は、ベストイレブンに選ばれたDL奥野光貴（4年、京都・西京高）、DL高野友陽（3年、鹿児島・加治木高）、LB西川将（4年、滋賀学園高）、LB百瀬皓太（4年、兵庫・報徳学園高）、DB天内太生、DB内橋宏太郎（3年、大阪・千里高）を中心に、パインボウルでも堅実なプレーが期待できそうだ。百瀬は主将も務め、ハードタックルが持ち味。奥野はQBサックもリーグ戦で決めており、内橋は北海学園大戦で3インターセプト、1TDと大暴れ。北海学園大のパス攻撃を封じた。

一方、4戦全勝で東北学生リーグ1部を制した東北大は、パインボウルに8年連続出場で8連勝中。昨季就任した萩山竜馬監督（元オービック・シーガルズ）の指揮で、リーグ戦はランプレーを中心に、東北大56-0仙台大（規定により第3Q終了でコールド試合）、東北大21-6秋田大、東北大16-14岩手大、東北大68-0東北学院大（東北学院大が第4Q棄権）と、TDを量産した。

中心選手はRB石尾渉次郎（2年）、主将でもあるWR小坂健太（4年）、QB富山慶太（4年）、守備のかなめのDL白木寛慈（2年）ら。石尾は7月のグリーンボウル（仙台）で北海学園大を相手に154ヤードを走りMVP。小坂も同じ試合でキックオフリターンTDを決めている。DL白木は、1年生で日米親善試合の日本代表に選ばれた経験を持ち、リーグ戦の秋田大戦で2回のロスタックルを決めた。